

マリル・ハート・マッカーティ著
田中浩子訳

ノーベル賞経済学者に学ぶ 現代経済思想

〔日経B.P.社・二〇〇二年七月〕

本書は、一九六九年から一九九九年までにノーベル経済学賞を受賞した四人の業績を、個々人のエピソードをまじえながら解説したものである。これだけであれば通常の紹介書と変らないうが、出色なのは著者の言葉を借りれば、個々の経済思想ではなく、それらの関連を広く語り、問題を見つめる目を提示していることである。そのため、個々の業績だけを見ていただけでは、みえてこない相互の関連、類似・対立している思想などもつれた糸が見事に解きほぐされている。難解と思われぬ思想が平易な語り口と明快な解説によつて読者の前に提示されている。

本書は大きく次の八部からなっている。第一部合理主義者と個人の選択(四名の紹介)、第二部合理主義への制限と

政府の役割(五名)、第三部情報を数量化する(五名)、第四部景気が停滞するとき(六名)、第五部モデルを構築した学者たち(七名)、第六部成長と発展(五名)、第七部金融の成長が投資を呼び込む(一三名)、第八部制度の誕生と変化(五名)。今後の経済学の方角性として著者が指摘しているのは、一つは経済学が演繹法から帰納法へ、自然科学と同じく科学的になっていること、もう一つは個人の社会の中での役割、社会には対人関係を形作る手段として制度的構造の必要が認識されてきていることである。

本書によつて受賞経済学者のいくつかの共通点が浮かび上がってくる。まず、これまでの受賞者が全員男性であること。第二に、ほとんどの受賞者が移民の子供か本人自身が移民の過去を持つていること。これはそれだけ優秀な人たちがアメリカに移住してきている証左でもある。それとナチの占領などの時代的な背景も大きく関わっている。第三に、経済学に志す前に物理・

数学を専攻している人が多いこと。これは経済学が社会科学として自然科学と最も近いところに位置していることを物語っている。第四に、シカゴ大学出身者が教授が多いこと。第五に、受賞者皆がすべて順調な道をたどったわけではないこと。自らの論文がジャーナルへの掲載を拒否されたものも何人かいることである。第五に、日本人はまだ受賞していないこと。

本書は本文が五四四頁におよぶ大著であり、読みこなすまでに物理的に時間がかかるのと、ノーベル賞に値する理論の自身を完全に理解するという別の困難さにつきまとう。そのため何度も読みこなす必要があるし、それだけの価値がある書物である。本書から経済学の範囲が経済だけではなく、経済と政治、経済と倫理、経済と制度などに拡大してきている流れがわかる。さらにこれが絶対だというものはなく、既存の理論や制度を常に点検しながら新たな挑戦を続けていく重要さを教えられる。(山本一巳)